第444号 昭和57年 6月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年 8月31日 第三種郵便物認可

1982年（昭和57年）
6月号（No. 444）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

昭和 57 年度日本山岳会通常総会 …（1）
海外の山では ……（2）
ヴィンソンマッシフ（南極大陸最高峰）
の第2登について　吉田　勝 ……（2）
第 19 回「この一本展」より（3）…（3）
追悼　坂本直行氏逝去 ……（4）
東西南北 ……（5）
お知らせ ……（5），（10）
科学研究委員会，海外委員会，
その他
昭和 56 年度事業報告 ……（6）
昭和 57 年度事業計画（案） ……（8）
昭和 56 年度収支決算書 ……（7），（8）
昭和 57 年度予算書（案） ……（9）
ルーム日誌・会員移動 ……（10），（11）
図書受入報告
図書委員会 ……（10）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

留守番電話（電話番号234―六六五九）

昭和五十七年度 日本山岳会通常総会 新監事に小倉茂暉氏

総会で挨拶する佐々会長・撮影　岡沢祐吉

社団法人日本山岳会の昭和五十七年度通常総会は、若葉薫る五月十四日（金）午後六時より会員多数を集め、東京市ケ谷の私学会館（東京都千代田区九段北四ノ二ノ二十五）の四〇五号室で開催された。

この総会では、昭和五十六年度事業報告および収支決算、財産目録（第一号議案）、昭和五十七年度事業計画案および収支予算案（第二号議案）、昭和五十七年度役員（監事二名）の選任（第三号議案）などの承認が行われたほか第四号議案として昭和五十七年度除籍者の件が提案された。そして総会終了後は、引続いて同館同階の四〇六号室で、恒例の懇親会が行われ極めて盛会であった。その内容は次の通りである。

まず、総会は神崎忠男総務担当常務理事によって、本日の出席者一三八名、委任出席者一、六一六名、計一、七五四名であり、従って定款による在籍会員の三分の一を満たすものとして総会の成立が宣言された。次いで就任以来一年間を経た佐々会長の挨拶が行われた。佐々会長はこの一年間をふり返って、各委員会活動や国際交流の活発化を喜ぶとともに、当初の目標であった地方支部との連けいの難しさなどの感想を述べると共に、これらの諸活動を財政面から支えるものとして基金或いは財団とでも言うべきものを近く発足させたいので、それに当っては会員各位の協力を仰ぐ旨の要請があった。

ひき続き渡辺兵力副会長による会務報告が配布資料にもとづいて行われた。それによれば、昭和五十七年三月三十一日現在の会員総数は三、七六〇名で、昨年に比較して純増は約百名。なお物故会員は次の二十一名。ご冥福を祈り一分間の黙祷が捧げられた。

小崎司郎　是行定一　三谷忠一
小野寺良　小池新二　角口想蔵
三重野勝彦　八木橋豊吉　折元秀穂　柳沢悟　橋本晋七郎　立川重衛　武藤晃　奈良隆之助
内田慶治　鴫満則　寺西洋治
浅井東一　高田俊雄　藤沢乙三
武藤清次

定款二十九条にもとづき議長に佐々会長を選出、ついで議事に入った。まず一号議案のひとつ昭和五十六年度事業報告と二号議案のうちの昭和五十七年度の事業計画案は、総務担当伊丹紹泰常務理事が配布資料によって説明に当った。昨年度行った主な事業はI・M・F・パタック会長の来日をはじめ印度のサリーン氏、英国のコールズ氏などの外国よりのお客さまをはじめ多数の方々の来会があったほか、集会委員会、自然保護委員会等の現地小集会、研究会などが行われた。また主な海外登山としては学生部の五年計画で行われるボゴダ峰周辺の登山隊などがあった。五十七年度事業としては大局としては五十六年度と変わってはいないが、登山の指導奨励に必要な集会、研究会、講習会などを多数行うほか、去る五月三十一日に行われたC・ハウストン博士を囲む会をはじめ本年も外国からの来会者も多く予定されている。また近くはウェストン祭も例年通り行う予定であるし、学生部のボゴダ峰の第二年目の計画も実施される。

この説明に対し、事業計画実施に当っては本部と支部間の重複の

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

ないよう調整をはかる必要性のある事の要望があったほか、五十七年度事業計画案のうち低圧トレーニングに対し質問あり、中村純二科学研究委員会担当理事の説明があったのち、それぞれ拍手をもって承認された。

次の議題である昭和五十六年度収支決算、財産目録並びに五十七年度収支予算案については、財務担当である西村政晃常務理事が説明を行った。

それによれば一号議案の五十六年度収支決算は収入予算が三、一五一万円に対し、その結果である決算額は四六、三〇一、四九八円となって、予算額を一四、七九一、四九八円と大巾に上まわっている。この理由はルーム購入のために借りていた長期の借入金を別途会計から一、二〇〇万円ほど取りくずして返却に当てたためと、もうひとつは図書出版研究基金を特別会計から組み入れ、図書一三七冊を購入したためで、この二つの大きなイレギュラーの支出のためである。従って一方の支出の部の方も予算額に対して決算額が大巾に上まわることになる。しかし、これらのイレギュラーな支出をのぞくと、五十六年度は実質ではプラス四〇万円、若干の黒字ということになった。これらの措置は数回も理事会において討議され決定されたもので、そのため期首には三千万円ほどあった繰越金はその半分程に減少はしたが、他方ルーム借入金もそれだけ減ったことになり、年間の返済金は今までの五八〇万円からいっきょに三三〇万円となり、二五〇万円ほど少なくなったわけである。

また五十七年三月三十一日現在の財産目録は基本財産、建物および土地、絵画などは異動はないが、什器備品については書棚、図書も一五一冊ほど新規に受け入れられている。現金および預貯金については合計一八、二五四、九一四円となり、負債は当然、長期借入金が大巾に減少した。

昭和五十七年度の予算書については収入を三、二七五・五万円ほどに見込んだ。これは前年より一二四・五万円の増であるが、これに対して支出の方は運営管理費、事業費その他で三、五三五・七万円となって二六〇・二万円程の赤字となる。これは収入をある程度シビヤーに考えたためで、ちなみに昨年の場合は四九〇・二万円の赤字であったが、実績では前述のように黒字となっているので、五十七年度の場合は更に予算段階でも赤字巾を少なくしたので一層の堅実化が計られているわけである

以上に対し鳴原啓佑監事より総て正確かつ妥当である旨の監査結果の報告がなされた。

続いて質疑応答に入ったが、前述の一三七冊の図書購入に対してかなり厳しく突っこんだ応酬が見

海外の山では

ソ連登山隊は、史上初の十一人という大量のエベレスト登頂を未踏ルートから果たし、同峰にまつわるトピックがまた追加された。この計画は、一九八〇年のモスクワ・オリンピックと同時期に行われる予定だったが、アフガニスタン侵攻の年であり、ネパール国民を刺激しない配慮からか果たせなかったもので、これでソ連もエベレスト登頂国の仲間入りをした。

今回の登山隊構成はエフゲニー・タム隊長ら十七人、うち十二人が登はん隊。南西壁の英ボニントン隊（一九七五年）ルートよりは西稜寄りとされ、高度八五〇〇㍍の最終の第五キャンプを基地に、五次にわたる波状攻撃が行われた。

第一次隊＝エドアルド・ミスロフスキー（四五）、ウラジミル・バリベルジン（三三）、五月四日六時十分C5発、十四時三十五分頂上。

第二次隊＝セルゲイ・ベルショフ（三五）、ミハエル・ツルケビッチ（二九）、四日十八時C5発、二十一時第一次隊の下降に合流、二十二時二十五分登頂。

第三次隊＝ワレンチン・イワノフ（四一）、セルゲイ・エフィモフ（三三）、五日朝C5発、十三時二十分登頂（四十五分間頂上で映画撮影）

第四次隊＝カズベク・ワリエフ（三〇）、ワレリー・フリシチャトゥイ（三一）。七日十七時C5発、八日一時五十分登頂。六日、いち時行方不明が伝えられていた。

第五次＝ワレリー・ホムトフ（四〇）、ウラジミル・プチコフ（四一）、ユリ・ゴロドフ（三八）、九日十一時三十分登頂。

ソ連のエベレスト登山を年代順にたどってみる。一九五二年の冬、スイス隊がポストの登頂に難渋を極めた直後、三十五人の大部隊を派遣した。陸軍機五機を投入、モスクワ―ノボシビリスク―イルクーツクからラサへ、と輸送。このうち六隊員が八〇五〇㍍の最終キャンプを建設して、「天候が許せば二日以内に頂上をうかがう」を、モスクワの作戦本部に連絡したのを最後に消息を断った。翌年の英エベレスト登頂の年に、北側ではソ連の大捜索が行われたが詳細は不明。ただ、時期的にも、また装備の点でも、その欠陥がきびしく批判された、と、ペーター・ハーベラーは「Everest impossible victory」に述べている。

一九五七年十二月一日付のソ連紙「コムソモーリスカヤ・プラウダ」紙が中ソ合同のエベレスト登山計画を発表した。これは五九年の中国建国十年の記念事業の一つとしている。その後の情報はないが、五八年、中ソ合同でロンブク氷河をつめ、六五〇〇㍍に達した。その後チベットの内乱で計画は断念されている。これは全ソ地理学報（一九六三年版）によるものである。その後中ソ関係は決裂しており、北面からの登山は行われようはずもなく、今回の快挙は二十四年ぶりとなる。中央アジア探検史にソ連の先縦者が果たした役割は多大なものがあるだけに、北面からの登頂も今後の課題として当然残ろう。

（片山全平）

ヴィンソンマッシフ（南極大陸最高峯）の第二登について

吉田　勝

表題について、あまり知られていないようなので簡単に紹介する。

第二登は一九七九年十二月某日にP・ギジスキー（西独）、W・バキッシュ（西独）、V・サムソ

られたが、松家晋図書担当理事よりの説明の後拍手のうちに承認された。

第三号議案の役員改選については渡辺副会長より、本年度は監事交替のみであり、この件については定款にもとづき評議員会の推せんによるものであるため、その評議員会の結果、鴨原監事は退任、代って小倉茂暉（四二四〇番）氏が選ばれ、なお太田敬監事は留任となる旨発表されたが、これも全員異議なく承認された。

第四号議案は六十九名の昭和五十七年度除籍対象者についてであるが、事務局もかなり努力はするが、紹介者、知人などから本人に通知することによって出来るだけ除籍者を減らすことが確認され、承認された。

この間、神崎常務理事より若干の事務連絡があったあと、本総会の議事録署名人は堀内章雄氏（四五八三番）と坂本正智氏（八一八四番）にそれぞれ決定された。

最後に田口二郎副会長の閉会の辞により午後七時半総会は無事終了した。（本記事関係は別掲資料を参照のこと）

ついでその後恒例の懇親会が同階の四〇六号室で行われた。会場には先ほど説明された貴重な購入図書が展示され、机上にはビールや料理が並べられていた。まず懇親会は佐々会長挨拶、総会前に開催された支部長会議の報告が出席各支部長（静岡、東海、越後、関西など）によって行われたのち、三田元会長の音頭で乾杯、懇談となった。懇談は各支部長を囲んでなごやかに盛り上がっていったが、最後に西堀前会長の勇ましい手じめによって午後八時半過ぎに閉会となった。（小倉　厚）

第十九回「この一本展」より（3）

九、日本名山図会

（天・地・人　三冊）

谷　文晁　著

文化九年五月初版

江戸須原屋刊

「日本名山図会」は、江戸時代の画家谷文晁（一七六三～一八四〇）が描いた日本の山八十九座の画集で、文化九年（一八一二）の五月に江戸の須原屋茂兵衛方から発売された天・地・人三冊の本である。この本は、①山だけを対象として描いた風景画集であること。②北は北海道から南は九州にいたる、広い範囲にわたる山々が描かれていること。及び、③描法が誇張的でなく対象を忠実に捕えている点、洋画におけるスケッチに似ていること等から、この時代の刊本中ユニークなものとして評価され、明治以降多くの覆刻本を見るにいたったものである。

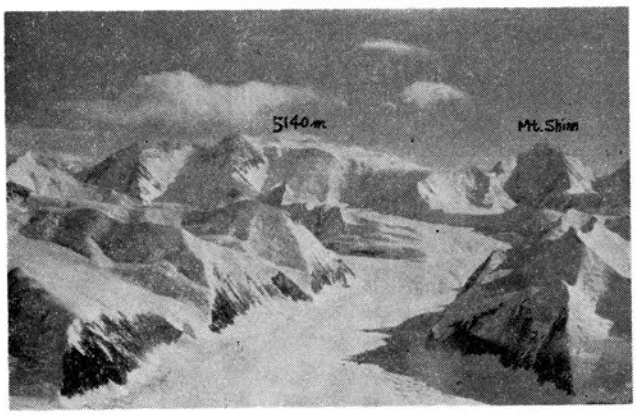
ところでこの「日本名山図会」には、①前身ともいうべき「名山図譜」なる本があること。②刊記が明確でなく、出版年が不明であること。及び、③序文を異にするいくつかの異本があること等、書痴をして興味をそそるような事情が存在し、研究している向きも多いようであるが、本日ここに展示する一本は、版元が松柏堂から千鐘房に移り、名も「日本名山図会」と改めて江戸日本橋の須原屋から初めて市販された、いわば普及本の初期のものに該当する本で、巷間見掛けることの非常に少ないものである。

この本は、①柴　邦彦のほか二名の序文が巻頭に掲載されていること。②本のサイズが後刷のものよりやや大きいこと。及び、③紙質が後刷のものより上質で、かつ印刷が鮮明であること等、今日われわれがしばしば目にするオリジナル、あるいは洋装本とは異った特徴を有している。この後、同じ文化九年の刊記本でも、柴　邦彦以外の序文は廃止され、各所で販売されるに及んで文化九年の刊記も、遂に姿を消すことになるのである。なお、展示の本は入本（セットでなくバラで集めた本）なので、第三巻のみ表紙を異にするが、用紙は同質のものである。

神原忠夫

ノフ（ソ連）の三人パーティにより、初登ルートから行われた。リーダーはP・ギジスキーと思われる。彼等は米国の地質調査隊の共同研究隊員で、エルスワース山地中央部の調査基地からヘリコプターで山麓に運ばれ、二五〇〇㍍付近にアタックベースキャンプを設置し、三〇〇〇㍍にC1三七〇〇㍍にC2を設置し、そこから頂上を往復した。BC―頂上―BCと四日間で終了している。ルートとしては氷の斜面のカッティングが手強かったという。頂上には一九六六年の米国隊が残した旗（確か米国地理協会の旗であった）が風にちぎられて残っており、彼等はそれを持ち帰って来た。詳細は目下問い合わせ中なのでいずれまたご報告出来ると思う。

なお、当時私は同じ米国隊のキャンプに滞在し、登頂を無線電話で祝福し、後日に彼等から登頂の様子を聞いたのである。キャンプの最終日にヘリコプターで山脈の東―西と回遊し、ヴィンソンマッシフを近くに眺めることが出来た。大きな氷河の東面（写真）と急な斜面の西面（登頂ルート）と、コントラストのあるどっしりとした山である。米国隊の調査キャンプについては別に詳しく報告した（雑誌「極地」三十二、三十三号など）ので、興味をお持ちの方は参照して下さい。



ディター氷河上空から見たヴィンソンマッシフ東面，頂上は雲に隠れ気味である。登頂ルートは西面で写真の裏側になる。

十、大唐西域記

十二巻本
（一冊二巻、合本六分冊）
承応二年（一六五三年）
中野五郎左衛門刊

大唐三蔵玄奘法師の「大唐西域記」については、改めて説明不要な古典ですが、展示会に持参致しましたのは、三〇〇年余り前に刊行された版木本というところに興味があるかと思ったからです。

遣唐使船（最終第十五回西紀八九四年）の留学僧や鑑真（西紀七五三年＝天平勝宝五年）によってもたらされて以降、写本で流布していたのを、寛永二〇年（一六四五）と承応二年（一六五三）に版木本がつくられ、各地の寺などに普及するようになったそうです。東洋史専門家、山岳探検史家の方々によって、中央アジアの史実・諸探検が深く研究し尽くされているシルクロード・ブームの昨今、当書の説明などは蛇足ですが、大雑把に述べてみます。仏教原典を求めて天竺へ、玄奘法師は西紀六二九年秘かに長安城をいでたち、六四五年帰還するまでの大旅行記で、見聞した（伝聞も含めて）胡人の国々の風俗産物、気候、大自然などが詳しく纒められている信頼できる古代の地理書とも評されております。往路には天山、大雪山、帰国時も葱嶺（巴密爾山）などの大山脈を辿り、登山・探検の点からもパイオニアだったようです。西へ向かって大砂漠タクラマカンの北辺を過ぎて大清池、シルダリア、アムダリアの源流地を横ぎり、サマルカンドで南下、アフガニスタンのバーミアン大仏を訪れ、大雪山中を迷いながらインドに入り、仏教擁護の王や高僧に会い問答を重ね、釈迦の遺蹟を尋ね、数々の仏典を携えて帰途についた。アフガンの活国から東へ、ワハン、パミール山谷を経てタシュクルガン、タクラマカンの南からロプノール、敦煌のコースで長安へ戻ってきた。

かって白瀬老中尉は幼少時に、生家浄蓮寺にあった西域記を読破して、未知への憧れを培ったと翁の直話を聴いたことがある。解説書がなければ、この難解な漢籍を読むなどは勿論、判読も筆者には困難であるが、明治以降優れた文献が数多く出版されている現在、素人にも理解し読みこなすことができるのは幸いです。

承応版の当書は、表紙に渋が塗ってあったので、保存状態はかなり良いようです。ここには持参しておりませんが、二人の弟子による伝記と旅行記を兼ねた「大慈恩寺三蔵法師伝」十巻（和本綴三冊本）もあります。この方は紙魚にひどく食い荒らされていて、本文は穴だらけになっております。探検史的な観望を試みるとき、西域記と慈恩伝の双方を併せみますと、アジア内陸の大自然にもひるまなかった魅力ある人間像、玄奘法師の巡旅の英姿が彷彿としてくるようにおもえます。

木村義昌

十一、Mountaineering

(Badminton Library Series)
by C.T. Dent and other writers
London, Longmans, 1914

昭和の初め頃、登山の指導書と言えば、ヤングのマウンテン・クラフトか、スイス山岳会ウト支部のラードゲーバー・フューア・ベアクシュタイガーが主だった。私たち学生は、これらをむさぼり読み――お蔭で洋書を繙くのが憶劫でなくなった――ザイルの結び方や氷雪技術を覚えたものであった。

それらに比べると、このデントの本は、より一昔前のもので、技術的には少しばかり古めかしいが、私の好きな本の一つである。

英国はバドミントン・スポーツ叢書の一つで、初版は一八九二年、一九〇〇年に三版として改訂され、これはその再版である。

執筆者は当時の英国山岳会の錚々たる連中で、その中に、コンウェイ、フレッシュフィールド、マシュウなどの名も見え、編者のデントの章も多い。

内容は、いわば登山の手引書だが、どの章にも、今日でも通用するピリッとした言葉が散りばめられてある。五百沢流とはいかないが、スケッチの仕方やガイド無し登山の項も見られる。

中で面白いのは、そのカットで、

追悼

坂本直行氏逝去

林　和夫

会員坂本直行さんが、去る五月二日逝去された。享年七五才。愛する山と花を明るくさわやかな筆で表現した画と、ユーモアと反骨精神に満ちたあたたかい人柄で多くの人々に親しまれ敬愛された坂本さんの頑健な身体も、すい臓ガンには勝てなかった。

1973 年 8 月カナディアンロッキーにて．
写真中央が坂本氏

北大農学部実科を卒業（昭和二年）後、十勝原野に入植し、苦難の開墾生活三〇年の後、やせた地味、寒冷、害虫などに押しやられ、自然との闘いには敗退して離農した。

しかしこの間に五男二女を育て、更に明け暮れ親しんだ日高山脈の四季折々の姿と、野の花は美しい絵となり、画文集となって見事に開花した。その後ヒマラヤやカナダも訪れてその山の姿を残されたが、やはり完全に自分のものにされた北海道の山を画いたものにすぐれた作品が多い。

終戦後しばらくは、農民運動の闘士として官権の理不尽と闘い、離農してからは自然保護にも努力され、大雪山縦断道路や日高山脈横断道路の建設反対運動にその反骨精神を発揮された

坂本さんの剛毅果断、常に前向きであった生涯は、さすが土佐の坂本竜馬の血を引く人であったと思わせるものがある。

筆者にとり、学生時代はじめてお会いしてから五〇年近くになる厚い交わりは、何ものにも換え難い貴いものであった。あの日本人ばなれした立派な風貌と大きな目玉に再び接し得ない淋しさと悲しさは筆紙につくしがたい。

どれもがそれぞれの章にふさわしく、ユーモアに溢れ、それだけ見ても愉しく、ほほえまされる。主としてウィリンク画くところだが、目次四頁に亘って九十一のタイトルが紹介されている。

中では、UNSTABLE EQUILIBRIUM や THE AXE FIEND が面白い。写真は一葉もなく、図版十二葉もなかなかだ。SERVE HIM RIGHT はおかしく、BENIGHTED では肩をすぼめ、BRITISH HILL WEATHER では心がなごむ。

この本が日本で有名になったのは、大島さんの有名な「涸沢の岩小舎……」（登高行・第五年・一九二四年）の一文からで、一とき、ピッケル小脇に、親爺のお古の背広やチョッキを一着に及んだ格好が「バドミントン・スタイル」として、流行ったものである。

この本は、当時、恐らく、丸善あたりから、かなり入っていただろうが――裏表紙に鉛筆書きで、五・一〇とある――私にとって「この一本」なのは、畏友、故三木準さんからの頂戴ものだからで、大切にしている。

彼は、北大出の林学士で、山好きから林学を学び、森林立地から岩石の知識の必要を悟り、東北大学の岩石の教室に入られた。一九二五年、私の二高生のときに、春の飯豊山にお誘いし（五月の飯豊山・山岳・第二十五年・昭和五年）、ご一緒したが、その記念にと、一九二七年、私が大学に入った時に下さったものだ。

三木さんは、その年の夏、蔵王山調査を終えての帰途、久喜で列車から落ちて逝くなられた。杜の都に佳人を遺されて。　合掌

佐々保雄

十二、The Ascent of Mount St. Elias [Alaska]

by H.R.H. Prince Luigi Amedeo di Savoia Duke of The Abruzzi

Edition de luxe. 29×20 : pp. xiii 240. London, Constable, 1900

イタリアのアブルッツィ公による一八九七年のセント・エライアス登頂記の英語版。同公の後年の遠征記と同様に、執筆はフィリッポ・デ・フィリッピが担当、写真撮影は当時の名手ヴィットリオ・セッラによるもので、この特刷本では、網版の写真をいちいち貼りこんでいるところが変っている。

サヴォイア・アオスタ家の出であるアブルッツィ公は十七歳で海軍に入り、十八カ月の遠洋航海のあと、アルプスで本格的に山登りを覚え、マッターホルンのツムット稜を初登したA・F・ママリーとともに、その第二登をやり遂げている。

一八九五年に世界周航の途次インドに寄港し、ダージリンを訪れてカンチェンジュンガ山群の大観に接して、ヒマラヤ遠征を考えはじめた。あたかも航海中に、ママリーがナンガ・パルバットで行方不明となったことを知り、この山を遠征目標に選んだほどである。たまたま、インド西部には伝染病がひろまり、その他の悪条件も重なって、この遠征は見送られ、そのかわりに選ばれたのが、アラスカの処女峰セント・エライアスだった。

一八九七年の初遠征で初登頂をみずから行なったアブルッツイ公は、一九〇六年にルウェンゾリ遠征、さらに一九〇九年にはK2を目指すカラコラム遠征を実現させたのであった。周知の通り、K2にアブルッツィ稜、サヴォイア氷河などの名が残されているし、これらの遠征の報告書もまた、古典的な名著として伝えられている。

セント・エライアス登頂記は、それら一連の大遠征のスタートを記録したものとして意義があると思う。一九三五年のJAC創立三十周年記念「山岳図書展覧会」に出陳したのもこの版本なので、二度のお役に立つというわけである

島田　巽

東西南北

ニュージランド遊記

富田　健一

お知らせ

比良探索山行と講演会

当委員会恒例の探索山行は比良山系の断層地形をテーマに、来る十月十六日（土）および十七日（日）の二日間比良ロッジ付近で行う予定です。

そのための勉強会を左記により開きますので奮ってお出かけ下さい。

・第十四回講演会

日時　昭和五十七年七月十六日（金）十八時三十分～二十時

場所　当会ルーム

題目　日本の山地と断層

講師　筑波大　小野有五氏

当日比良探索山行の説明と申し込み受付けも行う予定です。

科学研究委員会

お知らせ

JACの賀状（年末年始）用 写真を募集します

貴男（女）の撮った写真が世界各国の山の友に送られることになります。また今年度は全国の会員のみなさんにも頒布したいと思います。

奮ってご参加下さい。

一、日本の山岳風景
二、キャビネ版
三、モノクロ
四、しめきり　七月末日

海外委員会

お願い

「山」バックナンバーを譲って下さい

会報編集の参考に第一号から現在までの「会報」バックナンバーを揃え、会報編集専用として使用しておりますが、次のものが欠番となっておりますので、どなたか頒けて頂けるようでしたら、お譲り下さい。

201 202 203 204 205 206 211 212 214 242 244 245 266 268 269 270 271 276 283 285 289 292 の二十二部及び251～300の総目録です。

値段はお話合いの上で決めたいと思います。

（会報編集担当・岡沢）

南半球のスイスといわれるニュージランドは、かねてから一度訪ねてみたいと考えていたところだが、思いがけなく早く実現することになり、この一月下旬十日間の日程で出かけて来た。それは長くシドニー大学教授の職にある、故松井久之助会員のお嬢さんが昨年長期休暇で甲子園の実家に帰られた時に色々お話を伺う機会があったためである。

今回はシドニーに一泊し、あとすべてをニュージランドですごすことにした。南島、北島を通じ旅のハイライトは何といってもマウントクックを中心とする南アルプスの素晴らしい大景観に近々と接したことである。

この山系は直線にして約三六〇〝もある。マウントクックを中心とするマウントクックおよびウェストランドの二国立公園の中にはタスマン、フランツ・ヨセフ、フォックスの三氷河が流れ、山小屋も十四を数えることが出来る。山を楽しもうとする者にとっては垂涎せざる能わずといったところ。南島だけで七十七の湖がアルプスを囲んでちりばめられており、人も車も桁外れに少く、われわれにとっては文字通り別の世界、身も心も一度に解きほぐされたような感覚になる。クライストチャーチには飛行機の延着で半泊しただけだったが、南島の中心クインズタウンには二泊三日することが出来た。そこからミルフォードサンドにフィヨルド見物に出かけたが、その往き帰りもずっと左右にEYRE山脈やGARVIE山脈の男性的な山容、加うるに牧場の羊群と見飽きることがなかった。

もちろんマウントクック山を取りかこむ山小屋の数々を訪ね歩く年令相応の山旅にも楽しみを残しながら島を離れた。

北島ではマオリ芸術も楽しむことが出来た。そしてオークランドの美しい夜空に端正な南十字星を眺め得たことも印象深く、マウントクックの姿と共に自分への嬉しい土産となった。

日本山岳会
昭和56年度
事業報告
（五六、四、一　五七、三、三一）

一、登山の指導と奨励に必要な集会、講習会及び展覧会の開催

(1) 集会

五月一二日　I・M・F・パタック氏歓迎会（本会）
五月一四日　支部長会議（〃）
五月二五日　青年懇談会山中湖会議（山中湖）
六月七日　第三五回ウェストン祭（上高地）
六月一三・一四日　第四〇七回小集会山菜山行（鳥屋山）
六月一九日　青年懇談会一〇周年記念総会（本会）
七月一〇～一二日　青年懇談会三ツ峠岩登りトレーニング（三ツ峠）
七月二二日　ネパール　シャルマ氏歓迎会（私学会館）
七月二八日　第四一〇回小集会ボゴダ登山隊壮行会（本会）
八月九日　印度サリーン氏歓迎会（〃）
九月四日　英国コールス氏談話会（〃）
九月二〇日　ブリグバント登山隊トーマス・ルゴー君追悼会（〃）
九月二五日　青年懇談会主催バルンツェ遠征隊報告（〃）
九月二九日　第四一一回小集会自然探訪勉強会（〃）
一〇月三・四日　第四一二回小集会自然探訪（御前ガ遊）
一〇月一八日　婦人懇談会山行（秩父）
一〇月二四日　第三六回山岳図書交換会（本会）
一一月一～三日　第四一四小集会スケッチ山行
講師：清野　恒（小川山周辺）
一一月一一日　第一回会員懇談会
講師：長谷川恒男（本会）
一一月一七日　第四一五回小集会スケッチ山行批評会（〃）
一一月二一～二三日　第四一六回秋山山行（雨飾山）
一一月二六日　日本山岳会委員長会議（本会）
一一月二八・二九日　青年懇談会丹沢研究会（丹沢）
一一月八日　学生部マラソン大会（皇居周辺）
一二月三日　フランス山岳会近況を聞く会
講師：近藤　等（本会）
一二月五日　年次晩餐会（京王プラザホテル）
一二月五日　支部長会議（本会）
一二月一三日　婦人懇談会忘年山行（高柄山）
一二月一五日　第二回会員懇談会
講師：大谷映芳（本会）
一月一五～一七日　第四一八回小集会スキー懇親会及会員懇談会（八方尾根）
二月一一日　第四二〇回小集会千葉工大カラコルム遠征隊報告会（本会）
二月四日　イギリス山岳会近況を聞く会
講師：吉沢一郎（〃）
二月一三・一四日　青年懇談会丹沢研究会及会員懇談会（丹沢）
二月二〇日　山岳図書を語る集い
講師：吉沢一郎（本会）
三月一三日　第一〇回山岳史懇談会
講師：今井友之助　折井健一　五十嵐俊治（〃）
三月一五日　第五回会員懇談会
講師：山崎安治（〃）
三月二七日　第四二一回小集会第八回新入会員オリエンテーション（〃）

(2) 研究会

四月一七日　懇話会「フィルム・テープ類の保存と利用法」
講師：関塚貞亨他（本会）
五月二二日　第八回講演会「山の意外な顔」
講師：式　正英（〃）
六月二三日　第九回講演会「山をめぐる宗教と伝承」
講師：宮家　準（本会）
七月五日　第一回日本登山医学研究会（慈恵医大）
七月九日　中国天山研究会
講師：田村俊介（本会）
七月一一・一二日　一般募集　探索山行（出羽三山）
九月一八日　第一〇回講演会「登山の科学」
講師：徳久球雄（本会）
一〇月二三日　第一一回講演会「低圧トレーニングの実際と応用」
講師：島岡　清（〃）
一一月一二日　第一二回講演会「高令者の安全登山について」
講師：小林太刀夫（〃）
一一月～三月　婦人懇談会「女性のための高所登山セミナー」第三回開催
講師：高本信子　田部井淳子　小倉薫子（〃）
一一月一四日　登山技術研修会「登山技術の原点を見直す」
講師：松永敏郎他（〃）
二月六日　高所登山研究会（〃）
三月一二日　第一三回講演会「山岳における危機」
講師：国際山岳会会長アイブス博士　通訳：小野有五（〃）

(3) 講習会

四月一一～一三日　婦人懇談会雪上技術講習会（松永敏郎）（本会）
一二月三日　学生部主催雪崩講習会（金坂一郎）（〃）
三月一九～二二日　指導委員会主

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

財　産　目　録

昭和57年3月31日現在

（資産の部）

1. 基本財産

種　類	預　入　先	金　額
貸付信託	三井信託銀行　本店	2,380,000円
〃	日本信託銀行　〃	420,000
〃	中央信託銀行　〃	5,200,000
合　計		8,000,000

2. 現金および預貯金

種　類	預　入　先	金　額
現　金		91,796円
振替貯金	東京地方貯金局	372,557
普通預金	協和銀行　市ケ谷支店	1,000,781
〃	三菱銀行　市ケ谷支店	203,730
〃	三和銀行　本郷支店	29,958
〃	東京銀行　本店	1,604
〃	中央信託銀行　本店	212,979
〃	三井信託銀行　新宿西口支店	9,641
〃	日本信託銀行　本店	9,144
定期預金	協和銀行　市ケ谷支店	8,000,000
小　計		9,932,190
普通預金	協和銀行市ケ谷支店（図書出版研究基金）	750,224
定期預金	協和銀行市ケ谷支店（　〃　）	5,572,500
〃	〃　（会員遺贈基金）	0
〃	〃　（終身会員積立金）	0
〃	〃　（ルーム基金積立金）	0
〃	〃　（退職給与積立金）	2,000,000
小　計		8,322,724
合　計		18,254,914

3. 建物および土地

A　事務所および図書室	金　額
場所　東京都千代田区四番町5番4 構造　鉄筋コンクリート造，陸屋根，地下1階付5階建 （事務所）区分所有建物1階部分 103.32 m² 宅地持分 1,124.56 m²×339/10,000 （図書室）区分所有建物1階部分 55.22 m² 宅地持分 1.124.56 m²×339/10,000	72,720,170円
B　上高地山岳研究所	
場所　長野県南安曇郡安曇村上高地国有林114い林小班 構部　鉄筋コンクリート造（一造木造） 1棟　100.69 m²	9,583,808円
合　計	82,303,978円

4. 図　書

種　類	摘　要	冊　数
和　書	56年度　受入冊数　113冊	4,576冊
洋　書	〃　〃　38冊	1,716冊

5. 什器備品

品　名	取得年月日	取得価格	所　在
大テーブル（2台セット），チーク材 750×1200×720	48. 7.31	164,200円	上高地山岳研究所
ソファーセット，チーク材レザー張	48. 7.31	178,000	〃
冷蔵庫，日立 R303T	48. 7.30	148,500	〃
テレビ，サンヨー 20-C 501	48. 7.30	108,000	〃
スクリプトマティック宛名印刷機，M36	53. 2.10	265,500	事務所
リコピースーパードライ，SD-105	53. 2.27	158,000	〃
書庫内移動書架一式，コンパックル	53. 2.10	1,500,000	図書室
応接セット一式，布張イス，テーブルXLE-30	53. 8. 2	218,000	事務所
閲覧用テーブル（2台），木製	53. 9.28	250,000	図書室
ライティングビューロー，木製	54. 6.23	280,300	〃
テレビ，シャープCT-2601（寄贈品）	55. 6. 4	80,000	談話室
ビデオカセットレコーダー，シャープVC 7000（寄贈品）	55.12.27	116,000	〃
フィルム収納キャビネット（スチール製）	56. 8. 8	254,000	図書室
図書カード容器　木製3段	56. 9.12	200,000	〃
書　棚　木製2段	56.12.22	500,000	談話室
合　計		4,420.500	

6. 絵　画

題　名	種類・号数	作者名	掲載，保管場所
白馬岳	油　A—50	中村清太郎	日本民族資料館
富士山麓	油　A—25	茨木猪之吉	〃
田代池の白樺	油変型6	中村清太郎	事務所（談話室）
群猿	墨絵	石井鶴三	図書室
伊豆半島	油—10	茨木猪之吉	〃
針の木峠	油—10	茨木猪之吉	〃
徳本峠から穂高連峰	墨絵	石田吟松	〃
初冬の両神山	油—10	茨木猪之吉	〃
鳥（カット原画）	墨絵	石井鶴三	〃
メールドグラス	エッチング		〃
モンブラン	〃		〃
後立山連峰	水彩	中村清太郎	〃
カンチェンジュンガ	エッチング	シュラギットワイト	〃
ユングフラウ(1966年作)	油	山里寿男	事務所（集会室）
涸沢より北穂高	水彩—6	山里寿男	図書室
槍ケ岳初夏	油—10	中村清太郎	事務所（集会室）
カンチェンジュンガ	パステル	矢崎千代二	事務所（談話室）
北穂高滝谷	油—25	足立源一郎	〃
或朝の槍ケ岳	油—25	足立源一郎	図書室
北穂高岳主峰	油—52	足立源一郎	事務所（談話室）
槍ケ岳	油—P8	足立源一郎	上高地山岳研究所
タンボチェの僧院	水彩—4	清野恒	事務所（集会室）
シェルパニの親子	水彩—4	清野恒	〃

7. 刊行物・服飾品棚卸現在高

摘　要	金　額
刊行物（山岳・山岳覆刻版等）	1,424,500円
服飾品・その他（ネクタイ・ペナント・トレーナー等）	1,103,980
合　計	2,528,480

（負債の部）

1. 長期借入金　未済残高　15,331,114円

ア　借入先　中央信託銀行株式会社本店

イ　利　率　年利 8.16%

ウ　担　保　事務所および図書室の建物と土地を担保として差入れる。

エ　返済年月　昭和63年1月まで

2. 退職給与引当金　2,000,000円

社団法人日本山岳会 昭和56年度 収支決算書および財産目録を監査し，正確妥当なことを認めます。

昭和57年4月10日

社団法人　日本山岳会
監事　鳴原啓佑
監事　太田　敬

昭和56年度収支決算書

自　昭和56年4月1日
至　昭和57年3月31日

一般会計　収入の部

（単位：円）

勘定科目 大科目	勘定科目 中科目	予算額	決算額	増減
基本財産運用収入		**600,000**	**634,555**	**34,555**
	基本財産利息収入	600,000	634,555	34,555
入会金収入		**2,250,000**	**2,985,000**	**735,000**
	入会金収入	2,250,000	2,985,000	735,000
会費収入		**22,500,000**	**23,808,700**	**1,308,700**
	会費収入	22,500,000	22,925,140	425,140
	次年度会費収入		733,560	733,560
	終身会費収入		150,000	150,000
事業収入		**5,060,000**	**6,477,492**	**1,417,492**
	広告料収入	1,300,000	1,495,700	195,700
	山日記印税収入	560,000	560,000	0
	その他印税収入	0	155,341	155,341
	刊行物売上収入	500,000	487,600	△ 12,400
	その他事業収入	1,000,000	2,349,980	1,349,980
	山研使用料収入	1,700,000	1,428,871	△ 271,129
寄付金収入			**710,000**	**710,000**
	寄付金収入		710,000	710,000
雑収入		**1,100,000**	**2,136,177**	**1,036,177**
	受取利息	800,000	1,582,649	782,649
	雑収入	300,000	553,528	253,528
別途会計運用収入			**755,518**	**755,518**
	図書出版研究基金収入		755,518	755,518
別途会計取崩収入			**8,794,056**	**8,794,056**
	図書出版研究基金取崩収入		3,254,340	3,254,340
	会員遺贈基金取崩収入		1,107,700	1,107,700
	終身会費積立金取崩収入		3,780,000	3,780,000
	ルーム基金積立金取崩収入		652,016	652,016
小計		**31,510,000**	**46,301,498**	**14,791,498**
前期繰越収支差額		**15,991,793**	**15,991,793**	**0**
	前期繰越収支差額	15,991,793	15,991,793	0
合計		**47,501,793**	**62,293,291**	**14,791,498**

一般会計　支出の部

（単位：円）

勘定科目 大科目	勘定科目 中科目	予算額	決算額	増減
運営管理費		**10,770,000**	**10,678,067**	△ **91,933**
	給料・手当	4,750,000	4,397,550	△ 352,450
	文具費	120,000	112,410	△ 7,590
	印刷費	600,000	636,510	36,510
	旅費交通費	500,000	372,370	△ 127,630
	通信運搬費	1,000,000	934,080	△ 65,920
	火災保険料	70,000	60,350	△ 9,650
	営繕費	100,000	86,100	△ 13,900
	諸税会費	550,000	513,642	△ 36,358
	光熱水料費	150,000	182,845	32,845
	電話料	300,000	278,220	△ 21,780
	会議費	100,000	130,210	30,210
	交際費	20,0000	123,518	△ 76,482
	什器備品費	250,000	760,900	510,900
	振替手数料	170,000	178,915	8,915
	支部運営費	600,000	649,600	49,600
	福利厚生費	100,000	93,837	△ 6,163
	事務所管理費	600,000	578,800	△ 21,200
	その他管理費	360,000	360,000	0
	雑費	250,000	228,210	△ 21,790
事業費		**18,320,000**	**23,583,784**	**5,263,784**
	出版費	7,590,000	7,542,570	△ 47,430
	図書費	600,000	3,839,750	3,239,750
	調査研究費	510,000	497,735	△ 12,265
	指導費	1,060,000	1,146,406	86,406
	支部関係費	1,000,000	750,710	△ 249,290
	海外諸関係費	100,000	143,783	43,783
	山研運営費	1,860,000	1,815,401	△ 44,599
	その他事業費	800,000	2,168,000	1,368,000
	印刷費	600,000	1,626,025	1,026,025
	通信運搬費	3,800,000	3,675,820	△ 124,180
	光熱水料費	400,000	377,584	△ 22,416
借入金返済支出		**5,822,000**	**17,193,732**	**11,371,732**
	借入金返済支出	5,822,000	17,193,732	11,371,732
別途会計繰入支出			**905,518**	**905,518**
	別途会計繰入支出		905,518	905,518
予備費		**1,500,000**	**0**	△ **1,500,000**
	予備費	1,500,000	0	△1,500,000
小計		36,412,000	52,361,101	15,949,101
次期繰越収支差額		**11,089.793**	**9,932,190**	△ **1,157,603**
	次期繰越収支差額	11,089,793	9,932,190	△1,157,603
合計		47,501,793	62,293,291	14.791,498

別途積立金

昭和57年3月31日現在（単位：円）

内訳	前期繰越	繰入収入	取崩支出	次期繰越
終身会費積立金	3,630,000	150,000	3,780,000	0
ルーム基金積立金	652,016	0	652,016	0
図書出版研究基金	8,821,546	755,518	3,254,340	6,322,724
会員遺贈基金	1,107,700	0	1,107,700	0
退職給与積立金	2,000,000	0	0	2,000,000
合計	16,211,262	905,518	8,794,056	8,322,724

催　第二七回山岳スキー技術講習会（松永敏郎他）（本会）

(4) **展覧会**

二月二〇日　この一本展（本会図書室）

(5) **支部活動**

全国にある一九支部では、それぞれ集会、研究会、講演会、山行（海外登山活動も含む）等が活発に行われた。

五月一五～一八日　支部創立二〇周年記念「ネパール展」（東海支部）

五月五日　支部創立一〇周年記念山行：石上山他（岩手支部）

一〇月一〇～一一日　支部創立一〇周年記念山行：御岳山（岐阜支部）

一一月一四・一五日　第二四回紅葉会：南アルプス、井川、勘行峯付近（静岡支部）

二、登山施設の改善その他登山のための適切な事業

上高地山岳研究所を五月～一一月まで開所、山研委員会、集会委員会、青年懇談会、婦人懇談会、高所登山委員会、図書委員会、自然保護委員会。海外委員会、科学研究委員会による研究会を開催

三、山岳遭難の予防とその対策に関する企画及び指導

各大学山岳部による夏山診療所開設（七月～八月）

（槍ケ岳、五色沼、唐松、三俣山荘白馬岳、合戦小屋、立山、尾瀬）

四、自然保護活動の推進

環境庁との連携を密にし国立公園における山岳地の自然保護への協力

日高縦貫道路の反対活動

六月八・九日　日高横断道路計画現地視察（静内）

講演会「ヨーロッパの自然保護」

昭和57年度予算書（案）

自 昭和57年4月1日
至 昭和58年3月31日

一般会計 収入の部

（単位：円）

勘定科目 大科目	勘定科目 中科目	予算額	前年度予算額	増減（△）
基本財産運用収入		**560,000**	**600,000**	**△ 40,000**
	基本財産利息収入	560,000	600,000	△ 40,000
入会金収入		**2,700,000**	**2,250,000**	**450,000**
	入会金収入	2,700,000	2,250,000	450,000
会費収入		**23,000,000**	**22,500,000**	**500,000**
	会費収入	23,000,000	22,500,000	500,000
	過年度会費収入			
	次年度会費収入			
	終身会費収入			
事業収入		**5,615,000**	**5,060,000**	**555,000**
	広告料収入	1,350,000	1,300,000	50,000
	山日記印税収入	560,000	560,000	0
	その他印税収入	0	0	0
	刊行物売上収入	420,000	500,000	△ 80,000
	その他事業収入	1,535,000	1,000,000	535,000
	山研使用料収入	1,750,000	1,700,000	50,000
寄付金収入				
	寄付金収入			
雑収入		**880,000**	**1,100,000**	**△ 220,000**
	受取利息	480,000	800,000	△ 320,000
	雑収入	400,000	300,000	100,000
小計		**32,755,000**	**31,510,000**	**1,245,000**
前期繰越収支差額		**9,932,190**	**15,991,793**	**△6,059,603**
	前期繰越収支差額	9,932,190	15,991,793	△6,059,603
合計		42,687,190	47,501,793	△4,814,603

一般会計 支出の部

（単位：円）

勘定科目 大科目	勘定科目 中科目	予算額	前年度予算額	増減（△）
運営管理費		**10,810,000**	**10,770,000**	**40,000**
	給料・手当	4,750,000	4,750,000	0
	文具費	120,000	120,000	0
	印刷費	600,000	600,000	0
	旅費交通費	500,000	500,000	0
	通信運搬費	1,000,000	1,000,000	0
	火災保険料	70,000	70,000	0
	営繕費	200,000	100,000	100,000
	諸税会費	550,000	550,000	0
	光熱水料費	200,000	150,000	50,000
	電話料	300,000	300,000	0
	会議費	150,000	100,000	50,000
	交際費	150,000	200,000	△ 50,000
	什器備品費	50,000	250,000	△ 200,000
	振替手数料	200,000	170,000	30,000
	支部運営費	650,000	600,000	50,000
	福利厚生費	110,000	100,000	10,000
	事務所管理費	600,000	600,000	0
	その他管理費	360,000	360,000	0
	雑費	250,000	250,000	0
事業費		**19,735,000**	**18,320,000**	**1,415,000**
	出版費	8,465,000	7,590,000	875,000
	図書費	600,000	600,000	0
	調査研究費	555,000	510,000	45,000
	指導費	1,170,000	1,060,000	110,000
	支部関係費	1,000,000	1,000,000	0
	海外諸関係費	150,000	100,000	50,000
	山研運営費	1,745.000	1,860,000	△ 115,000
	その他事業費	1,250,000	800,000	450,000
	印刷費	600,000	600,000	0
	通信運搬費	3,800,000	3,800,000	0
	光熱水料費	400,000	400,000	0
借入金返済支出		**3,312,000**	**5,822,000**	**△2,510,000**
	借入金返済支出	3,312,000	5,822,000	△2,510,000
予備費		**1,500,000**	**1,500,000**	**0**
	予備費	1,500,000	1,500,000	0
小計		**35,357,000**	**36,412,000**	**△1,055,000**
次期繰越収支差額		**7,330,190**	**11,089,793**	**△3,759,603**
	次期繰越収支差額	7,330,190	11,089,793	△3,759,603
合計		**42,687,190**	**47,501,793**	**△4,814,603**

昭和57年度 事業計画（案）

一、登山の指導奨励に必要な集会、研究会、講習会、展覧会等の開催

(イ) **集会**

・小集会（報告会、講習会、シンポジュウム）　本会、その他　二〇回
・ウェストン祭　上高地　六月五日～六日
・山岳図書交換会　本会　一〇月
・年次晩餐会　京王プラザホテル　一二月四日
・山岳図書を語る夕　本会　二月
・山岳史懇談会　本会　三月
・来日外国登山家との交歓

(ロ) **研究会**

・高所登山研究会（五回）　本会、その他
・女性のための登山セミナー　本会
・雪崩研究会（二回）　本会
・海外登山研究会
・冬山医学研究会
・山岳図書研究会　本会

(ハ) **展覧会**

・この一本展（稀覯本）　本会　二月

(ニ) **講演会**

講師　井手貴夫（本会）
全国上高地集会
一〇月二四・二五日　（上高地）
講演会「山と鳥」　一月二二日
講師　柳沢紀夫（本会）
懇談会「日本の自然保護問題を考える」　三月二五日
講師　宇野　佐（〃）
フィールドマナーノートの作成

五、海外登山の企画および海外との交流

日本山岳会ボゴダ峰登山隊による中国ボゴダ峰登頂（八月～九月）
日韓交流白馬岳合同登山
四月三〇日～五月六日　（白馬岳）
日印女子合同登山　七月四・五日　（北アルプス穂高）
日韓交流合同登山　一〇月九日～一二日　（韓国）

六、機関誌などの刊行

「山岳七六年号」発行
会報「山」四三〇～四四一号発行
「山日記」昭和57年版編集

七、目的を同じくする外国山岳会等との情報交換

三〇ケ国六〇の団体と情報を交換
日中合同登山推進のため中国体協関係者と情報交換

・登山、山岳の科学研究に関する講演会
・海外登山家による講演会並びに映画会
・高所登山及び山岳に関する講演会

二、登山施設の改善、その他登山のための適切な事業

・上高地山岳研究所開所
　四月～一一月初旬

三、山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導

・夏山診療所開設（八ヵ所）
　七月～八月
・雪崩シンポジュウムの開催
・雪氷登山技術講習会の開催
・山岳スキー講習会の開催
・氷壁登攀技術講習会の開催（八ケ岳）
・岩登技術講習会の開催（三ツ峠）
・低圧トレーニングの実施
・合宿山行の実施

四、自然保護活動の推進

・各所での自然保護活動の推進
・自然保護全国集会
・フィールドマナーノートの作成
・自然保護に関する講演会

五、海外登山の企画および実施

・中国天山山脈
　（ボゴダ山群）の登山
・ソ連山岳連盟との交流
・その他交流登山

六、機関紙などの刊行

・「山岳」七七年発行
・会報「山」第四四二号～第四五三号、第四〇一号～第四五〇号目録発行
・「山日記」昭和58年版編集
・学生部「年報」第七号編集発行

七、国内および国外山岳団体との連絡、情報交換

・中国登山界との交流促進
・国内関係団体（日山協、都岳連）との密接な連絡
・海外登山団体との機刊誌および情報の交換
・日ネ協会の事業に対する協力（登山）

八、その他、目的を達成するために必要な事業

・「山と登山の科学」に関する文献の収集、整理（カード作成）
・フィルム、スライド類の目録作成
・山岳図書室の拡充を図る
・支部運営に関する連絡会と研究会
・その他、目的を達成するために必要な事業を行う

ルーム日誌（57年4月）

1日（木）高所、遭難対策委員会
6日（火）山日記編集委員会
9日（金）自然保護委員会
10日（土）会計監査
12日（月）理事会
14日（水）学生部集会、山研委員会
15日（木）会員懇談会
16日（金）評議員会
20日（火）婦人懇談会
21日（水）山岳編集委員会
23日（金）科学研究委員会、図書委員会
27日（火）フィルム委員会

今月の来室者　432名

会員移動（4月）

物故
一二六七　吉川　春寿（56・11・25）
一〇四九　津田　周二（57・4・19）

退会
六五三六　小林　久雄
六〇八五　江口　義夫
五九五三　向後紀代美
七二一〇　永浦　忠吉
九八九五　玉井　裕夫

お知らせ

・スライドとお話

日時　七月一日（木）十八時三十分より
場所　ルーム
講師　西丸震哉氏
演題　南極の未知の島々
　海外委員会

・七月三十日より「スケッチスクール」を木曽御岳、常念岳、上高地などで開きます。
　山里寿男
・八月十一日より十二日間、チロルアルプス山麓やワインの村へツアーの足を伸ばします
　坂倉登喜子

図書受入報告

図書委員会

昭和 57 年 3 月受入図書

1　T.S.V. 編「思い出」1982（編者寄贈）
2　ジョージ・シーハン著　新島義昭訳「シーハン博士のランニング人間学」森林書房（発売／山と溪谷社）1981（版元寄贈）
3　ジョージ・シーハン著　新島義昭訳「シーハン博士のランニング実践学」森林書房（発売／山と溪谷社）1981（版元寄贈）
4　金子民雄編「山書研究 **25** ヘディン著作目録」日本山書の会 1981（水野勉氏寄贈）

昭和 57 年 4 月受入図書

1　新井　清著「万葉の山をゆく（大和編）」ナカニシヤ出版 1982（版元寄贈）
2　北大山の会編「バルンツエ厳冬期登頂報告 1980／81」 1982（編者寄贈）
3　日本ヒンズー・クシュ，カラコルム研究会編「日本ヒンズー・クシュ，カラコル研究会報告書」1982（平岡誠一郎氏寄贈）
4　慶応義塾大学工学部山岳部編「嘯雲第 **4** 号」1982（編者寄贈）
5　D. マーフィー著　中川弘訳「神秘な国ネパール　女ひとりの冒険日記」社会思想社　1982（版元寄贈）
6　日本山岳写真協会編「ら・もんたあにゅ　すばらしき山々」出版科学総合研究所　1982（版元寄贈）
7　五来重編「山岳宗教史研究叢書 **15** 修験道の美術・芸能・文学（II）」名著出版　1981（購入）
8　五来重編「山岳宗教史研究叢書 **16** 修験道の伝承文化」名著出版　1981（購入）
9　ろうとる山岳会編「遙かなるアンナプルナ」1982（安藤忠夫氏寄贈）
10　神戸日本ブータン友好協会編「会員名簿1981」1982（編者寄贈）
11　中京山岳会編「会報第 **97** 号特集・創立 50 周年記念事業報告」1982（編者寄贈）
12　折元秀穂「径ひとつ」福岡まいづる山岳会　1982（版元寄贈）
13　北海道大学山岳部編「1979 年　知床遭難報告」1982（編者寄贈）
14　同人ユングフラウ編「登山計画書　ネパール・日本女子チャラン合同登山隊　1982～1983」1982（編者寄贈）
15　法政大学ラムジュン・ヒマール登山隊編「ラムジュン・ヒマール北稜 1980 年プレ・モンスーン」法教大学体育会山岳部 1982（版元寄贈）
16　Walt Unsworth “Everest” Allen Lane 1981（購入）
17　J.R.L. Anderson “High mountains and cold seas : a biography of H.W. Tilman” Victor Gollancz Ltd. 1980（購入）
18　Joe Tasker “Everest : The cruel way” Eyre Methuen 1981（購入）
19　Ekai Kawaguchi “Three years in Tibet” Ratna Pustak Bhandar 1979 Reprinted（購入）
20　Pierre Mazeaud “Everest 1978” Éditions enoël 1978（購入）
21　Arlene Blum “Annapurna : a woman's place” Sierra Club Books 1980（購入）

（以下次号）

語句の正誤

前号会報五頁「白瀬中尉伝記」の上段、三行目に木村善昌とあるのは木村義昌氏の誤りです。

また八頁、お知らせ欄にある山研の電話番号は〇六二三九五ではなく、〇二六三九五―二五三三ですので合わせて訂正させて頂きます。（編集）

昭和五十七年六月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 佐々保雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂